

第三部 言葉の時間形態～想起・約束・現在～

A. 想起としての説教

B. 約束としての説教

C. 現臨者の説教

17章 現臨の多様性

【主題】

想起せられた方（A）、そして約束されておられる方（B）は、さまざまな仕方で現臨される。いずれの仕方で現臨も彼の現臨にほかならず、彼の現臨として語らねばならない。だが、いずれも多くのものの中のひとつの現臨の姿でしかない。

18章 つなぐことととくこと

【主題】

来たりつつある救い手であり審判者である方にふさわしい言葉とは、自分が語ることを実行する言葉、すなわち、つなぎ、また解く言葉である。来たりつつある方の現臨を説教するということは、悪魔を追いはらうということであり、救いを求めて呼ぶことなのである。

19章 説教としるし

【主題】

到来しつつある方を、**今ここに現臨する方**として説教することは、その方のなさる**奇跡としるしを発見し**、その名を呼ぶことであり、その方がなさることを語り告げることなのである。

第I節 奇跡としるし（要約）

○聖書は、信仰告白に結びつく奇跡について報告
イスラエルは、出エジプトの奇跡によって生き、
新しき神の民は復活節の奇跡によって生きる。

- 霊が現臨する時、想起される過去の奇跡が現在化、霊の現臨は、奇跡そのものであり、“しるし”として現れずにはすませられないし、霊が霊として働く処では、驚異が起こりうる。神の霊において将来が現在に突入してくるがゆえに、奇跡には、将来が満ちている。

👉 だから…

○奇跡の問題性と曖昧さは、霊の現臨の問題性

もろもろの奇跡も、しるしも検証されるべき。

∞ 「しるしと奇跡」がみ言葉を解釈するとともに、み言葉が「しるしと奇跡」を解釈する必要あり。

∞ 「罪の赦しを解く説教は、奇跡が起こる余地を作る」

○み言葉の力、真理性・妥当性への問い

中風の者の治癒についてのマタイの記事（マタイ9・1～8）

「中風の男の癒やしの記事」と「我々の状況」との隔たり

主イエス

主イエスは、目に見えること（癒し）を行なったが、それは、見えぬままであるもうひとつのこと（罪の赦し）を明かにするためであった。主イエスは、両方ともなしうる力をお持ちであるから。

私たちの時代

私たちの時代は、罪の赦しに関心がないし、赦しを信頼してもしない。教会も、癒しより罪のゆるしの方を容易な事として行なって来た。

浮かび上がっている問題提起

現代の教会は、もはや、マタイの教会のように、癒しができなくなっているのに、教会は、尚も罪の赦しを語り得るのか？

- “罪の赦し”と“治癒”は緊密に結びつく。赦しを語る説教が奇跡となるなら、言葉と共にしるしも行われる筈。説教は、奇跡として起こる。そうでなければ、無。

奇跡としるしの関連、

- ❖ 奇跡としるしの二つは切り離せないが、区別は必要。
- ❖ 現実にかかるあらゆる奇跡はしるしとなる。だが、あらゆるしるしが奇跡となるわけではない。
- ❖ 奇跡は来たりつつある方が御力をお用いになることで起る。
- ❖ しるしの中に我々が読み取るのは、この御力の痕跡、しるしとは「現在、見ることができる“来るべき方の到来の痕跡”」。
- ❖ だから、説教はしるし。そして、どんなに虚しい説教も、神が働かれれば、奇跡となることがあり得る。

そして、

- 説教の真理性と力は、それに伴うしるしによってはかるわけにはいかない。

「説教が奇跡かどうか」＝

「説教を通して、神とその来臨が現れ出ているか」

奇跡の狹隘化（①聖書主義的世界像のもとに新約聖書の語る奇跡がそのまま起こると信じる ②現代的な世界像の名により、聖書の奇跡は不可能と決めつける）からの解放とは、奇跡の問題を神の問題と結びつけること。一切の律法・法則から自由な創造者であり救済者である方の行為であるから、奇跡となる。

80 しるしに伴う特別な危険：しるしと奇跡の孤立化

一つのしるしを絶対化してしまい、しるしが指し示しているものそのものであるかのように考えてしまうこと。しるしを絶対視した時、「霊の持つ多声性」は失われ、説教も分派的説教となる。

（6・9はここまで）

霊の持つ多声性、しるしの多様性は、

(例示) サクラメント(聖礼典、秘蹟)の多様性

しるしとしてのサクラメントの本質に関連

サクラメントを、“特に優れたしるし”として尊重するにしても、数多くのしるしから引き離し孤立化させたことが、教会と宣教を閉鎖的にし、サクラメントの力を奪った。

「しるしと奇跡」を問う問いは、“それ自身が奇跡であるような説教(第Ⅰ章 情熱としての説教)が行なわれるに至る「奇跡のコンテキスト(文脈、前後関係、背景、事情)」”を問う。(「孤立化」させない…ということは、文脈で考えていくということ。)



(「奇跡のコンテキスト」を問うためにせねばならない二つの事)

- ① すでに起こったか、今起こりつつある奇跡に照明をあて、これを解明すること(第Ⅱ節)
- ② 現臨するキリストの奇跡を告げること(第Ⅲ節)

第II節 奇跡の解明としての説教

現臨のキリストについての説教は、

- ① 眠っておられる方ではなく目覚めておられる方のことを語り、
 - ② 死んだ方ではなく甦られた方のことを語り、
 - ③ 何みなさらない方ではなく、働いておられる方のことを語る。
- そして、
- ④ キリストがなさること—御名によって生じる現実について語る。

(例)

サンヘドリンの議員が「否定できないしるし（邦訳『目覚ましいしるし』）」と呼んだ一例（使徒4・16¹⁾）—美しの門の処で、ペトロとヨハネが足萎えを「ナザレ人イエス・キリストの名」によって歩かせたこと（使徒言行録3・6²⁾）。この「否定できない（目覚ましい）しるし」がペトロ説教（使徒3:12~26）の“きっかけ”となった。この説教は、旧約聖書に記されたアブラハム、イサク、ヤコブの神に基づき、この出来事を解釈する—「ナザレ人イエス・キリストの名によって」起こったことが、聖書を手掛かりに解釈される。現在の出来事が聖書によって解釈されており、逆（聖書が現在の出来事によって解釈される）のではない。

「足萎えに起こった癒しの奇跡が、主イエスに起こった神の決定的行為によって説明される。それは、王座に上げられた方の行いであり、その前提と根拠になっているのは、“イエスの高举”という偉大なる神の救いの行為。だから、ここで起こった出来事は、主イエスのケリュグマによってのみ理解されうる」（by ウルリヒ・ヴィルケンス³⁾）

¹⁾ 使徒言行録4・16 “「あの者たちをどうしたらよいだろう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムの住民全体に知れ渡っているので、否定しようもない。」”

²⁾ 使徒言行録3・6 “ペトロは言った。「私には銀や金はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」”

³⁾ ウルリヒ・ヴィルケンス 1928年ハンブルクに生まれる。ハイデルベルク大学神学部においてG. ボルンカムに師事し、『知恵と愚かさ』の論文によって博士号を、『使徒行伝の伝道説教』の論文によって教授資格を取得。1953-1955年牧会に従事、1958-1960年マールブルク大学神学部の講師、

説教にとって、しるしを解釈することの意味

説教がしるしの解明を行なう、しるしは解明されることを求め、解
説されることを求める。そして、しるし自身が事柄を明らかにし、
しるしがしるしとして働く。上記の“しるし”では、しるしに、御名
が先行し、しるしの解釈を示唆している。だが、御名だけではしるし
を十分に説明できず、説教を必要とする。



洗礼・聖餐のサクラメントにおいても、それを授ける時の式文の言
葉だけでは、長期の効果は持てない。**サクラメントは説教を必要とす
る**。そうでなければ、サクラメントの執行はサクラメンタリズムに墮
する。病氣治癒が説教を伴わないと、ただ不思議な神秘的違法行為に
逆転してしまうのと同じ。



しるしを説き明かす説教は、神が今日行われていることの解釈とし
て行なわれる。神の現在の行動を、聖書を手がかりに解明し、証明す
る。神の具体的な行為が説教の「テキスト」。聖書の助を借り、この
「テキスト」(神の具体的な行為)に釈義が加えられる。これによって、
「説教の規範」ではなく、「**説教の限界線**」が示される。この「限界
線」は、ひとつの深淵に沿って走る。聖書誤用や熱狂主義の危険があ
るにしても、説教の根本的考察に決定的に重要なもの。我々の時代で
は、このような説教が行なわれるのは、神が具体的に「病氣治癒」を
なさった後ではなく、「政治的説教」において。

(恐るべき実例) 1914 年の説教—ドイツ民族の戦争による興奮を聖
霊降臨の奇跡だとして祝っている。聖書のテキストは、戦争開始を通
して出来事(神の臨在)を明かにすることはせず、その代わりに出来
事を飾り立てている。

テキスト(神の現在の行動)が同じような目に遭うのは、冠婚葬祭

1960—1968年ベルリン神学大学の新約学の教授、1968—1981年ハンブルク大学神学部の
教授、1981年10月より北エルベ福音主義教会教区のホルスタイン・リュベックの監督に就任。数
年前この監督職より退任。邦訳された著書に「ローマ人への手紙 EKK 新約聖書註解」がある。

における説教⁴。式文によれば、婚姻も死も神の行為。

結婚を、新約聖書の奇跡との連関において考察する

冠婚葬祭の説教の持つ問題性の全てを論じることは不可能だが、冠婚葬祭の説教全体に役立つことを示唆できる。

【体験】

冠婚葬祭というものがテキストにとって明かによい働きをしない。結婚や葬儀は、説教者を誘って、テキストを誤用させる。



問題はテキストにあるのか？その選び方にあるのか？

パウル・シェンプ⁵ 26 の結婚式説教で用いたテキスト エフェソ 5:32⁶だけ。「18 世紀にはすでに牧師が結婚式で“結婚の処方箋”を出してやるようなことをしていた」と結論。処方箋に反対することはない、しかし、結婚との関わりにおいて、現臨しておられる方とその行為についての説教が前提であり、それは結婚式だけではない。

シェンプは、まさしく重要である筈のテキストマタイ福音書 19:1～12、特に 19:6⁷について、殆んど説教していない。勿論、他にも重要なテキストとして、コリント I、創世記 1:27⁸、ガラテヤ書 5:16-25⁹がある。

⁴ 訳注 83) ドイツやスイスでは冠婚葬祭において説教をするのが当然とされている。日本のように式文だけ、というのは少ない。

⁵ パウル・シェンプ (1900 年 1 月 4 日、シュトゥットガルト生まれ、1959 年 6 月 4 日、ボン没) は、福音ルーテル派の牧師、宗教教育教師、神学教授であった。ナチス時代には、ヴェルテンベルク州教会において告白教会 (BK) の熱心な代表者として台頭し、1945 年以降は、ドイツのプロテスタントとユダヤ教の関係の刷新を精力的に提唱した最初の一人となった。

⁶ エフェソ 5:32 “この秘義は偉大です。私は、キリストと教会とを指して言っているのです。”

⁷ マタイ福音書 19:6 “だから、もはや二人ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。”

⁸ 創世記 1:27 “神は人を自分のかたちに創造された。／神のかたちにこれを創造し／男と女に創造された。”

⁹ ガラテヤ書 5:16-25 新共同訳聖書 小見出し “霊の実と肉の業” - “私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。肉の望むことは霊に反し、霊の望むことは肉に反するからです。この二つは互いに対立し、そのため、あなたがたは自分のしたいと思うことができないのです。霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。… “

何故、マタイ福音書 19:6 (or マルコ福音書 10:9) が、説教や結婚式の説教で殆んど扱われないのか？

- ∞ 結婚のサクラメンタルな理解を警戒するプロテスタント特有の不安が影響している可能性あり。サクラメントの数を巡る教派間論争が、福音主義的説教が現臨のキリストを語るのに、殆んど益をもたらさなかった。キリスト教の神秘宗教への転化が、キリスト現臨についての説教を狭くした。
- ∞ だからこそ、**先ず何よりも神の行為が、結婚式や結婚との関わりで説教されなければならない。説教者は預言者であってほしいが、神秘的祭儀の執行者であってはならない、つまり、神秘的聖別行為をするのではなく、言葉を伝達する。**
- ∞ ここで預言者的局面と並んで正しいのは、**知恵の局面。結婚式の説教は、知恵の言葉でなければならない。**しかし、預言者的次元を失い、神の現在における働きを明瞭に語ることを敢えて行わなくなれば、知恵を失い、月並みなものになる。

【クラウド・ヴェスターマン¹⁰】

『聖書及び教会の行動における祝福』

教会の職務執行を、祝福の概念から解明しようとした。ボーレン先生の私見「ヴェスターマンはここで無批判に聖書の祝福が我々の状況の中に移し入れられるかのように語る。今日の国民教會的冠婚葬祭の慣習の状況で、祝福は尚も可能なのか？」

【カール・バルト 創造論 IV/2 創造者なる神の誠め<ii>

第54節 交わりの中での自由 Ⅰ. 男と女】

バルトが「神が合わせられたものを、人は離してはならない」という主イエスの言葉について論じていること(教会教義学 Ⅲ“創造論”／Ⅳ 228頁以下)に、方向を見いだしたい。

¹⁰ クラウド・ヴェスターマン 1909年生まれ。テュービンゲン、チューリヒ等で学ぶ。1958～78年、ハイデルベルク神学大学旧約学教授。2000年没

バルトは、ここで「神の行為は隠れている」と強調。病氣治癒における神の行為が、単純に端的に極めて明瞭ではないとすれば、婚姻において（死においても）、神の行為は尚一層隠れていると言える。

バルトの問い「**神が本当に、取り消しようもない仕方で合わせられたのは何であるか、いかなるふたりの、いかなる結婚なのか。**…この人々の存在と行為が、神の誠めにふさわしく、これに一致する、服従の行為として受け入れられるとしても、それは彼ら自身の目にも隠されているのであって、義にして憐れみ深い神の判決においてのみ真実なのだ。夫婦自身の目に見えるところが、あの神の合わせてくださったという事実であることはあり得ない。」（232 頁）。



【説教に関して提起される問い】

では、**結婚式において尚、神の行為について語り得るのか？**今ここで、この場合において、摂理として、神が合わせてくださることについて語ることは許されないのか？

（バルトの論述）

神が彼らを合わせられた、ということ、彼らの（結婚という）契約が永続的であり、別れることもないということを伴い、示すような、人間のいかなる共同の努力・結合・共存も存在しない。

結婚の根拠は、彼らの手に与えられておらず、また彼らの目の前におかれていない。…彼らの結婚の神的根拠を、彼らは[手に]持つことはできず、また見ることだけでもできない。彼らはただ信仰の中で、結婚の根拠が彼らに、彼らの側での何の功績もなしに、神的憐れみを通して約束され、与えられているということを堅くって離さないでいることができるだけである。従って、彼らはただ、そのような根拠を神の恵の言葉の中で繰り返し尋ね求め、神から繰り返し願い求め、感謝して受け取るという仕方で、そのような根拠に頼る事ができるだけ。



幸せな結婚をした夫婦が、「神によって合わせられたこと」を自分達に根拠づけられないとすれば、不幸せな夫婦も、この神の奇跡からは

みだしていると自分で決めることもできない。

「それでも尚、神が自分達を結び合わされたのだ、と信じる
ことが許されており、命じられていないということでは決
してない。その夫婦の病気に、結婚の癒やしの兆候が全くみ
られあいとしても、自分達の夫婦生活はそれにも拘わらず
続くであろう、という望みを、信仰の中で抱くことを許され
ず、命じられてもいない夫婦はいない。」

結婚式の説教者は、組織神学者バルトのように巧みに語り得るか？
説教者はマタイ 19・6 を一組の男女に語り得ないのは当然ではな
いか？だが、神が合わせられる、という文章を説教で語り得ないなら、
式文としてもこれを用いるべきではないのでは？

【ボンヘッファーの説教※を手掛かりに、この問題を解明】

(※)

ボンヘッファーの姪であるレナートと、エバーハルト・ベートゲ¹¹との結婚に際して、1943年、
獄中から書き送ったエフェソ 1・12 に関する説教。ベートゲが編纂した「抵抗と信従」に「結婚
式のための説教」というタイトルで収められている。

① 序

婚姻は二人の人間の事柄であり、地上的な営みである事を強調。
このまことに人間的なことに對して、「神の導き」「神の意志」「神
の道」が指し示される。

ボンヘッファーによれば、このようにして（神の導き、神の意
志、神のみ働きにより）地上の結婚が、聖なる結婚へと至る。こ
れが、人間の行動に対する神の然り（アーメン）。

「今日、神は、あなたがたの『誓約』の然り^{ヤー}という答えに、御
自身の然りをそえてくださる。神の御心があなたがたの意志と
ひとつとなる。神は、あなたがたが勝利と喜びと誇り高き心をす
ら抱くことを許し、それを与えてくださる。だがまさにそのこと
によって、神は逆に、あなたがたを、あなたがたや人間に対する

¹¹ エバーハルト・ベートゲ（1909年8月28日 - 2000年3月18日）は、ドイツの神学者であり牧師で、
神学者で反ナチスのディートリヒ・ボンヘッファーの親友であり伝記作家として最もよく知られている

御自身の意思と計画を実行するための道具としてくださる。神は事実、理解しがたいほど遜った仕方、あなたがたの然りに対し御自身の然りを語ってくださる。それをするによって、**神は同時に、全く新しいものを造り出してください。あなたがたの愛から、聖なる婚姻を造り出してください。」**

- ② 5つの命題¹²によって、神が何をしてく下さるか、何をなさって下さったか、を述べていく。

最初の二つが重要。

- (1) 命題Ⅰ: **神があなたがたの結婚を導かれるのです。**そのことによって、人間の愛は、自分自身を超越して、ひとつの「立場」、ひとつの「務め」にまで高められる。もう少し正確に言えば、人間の愛に対応するのが、神による婚姻設立。「あなたがたが指輪をまずお互いに与えあって、それからもう一度それを牧師の手から受け取り直すように、愛はあなたがたより生じ、結婚は上から、神から来るのです。」—結婚が、より高き価値を持つ事が語られる。「神が人間よりもより高きものであられるように、結婚の聖さ、正当さ、約束は、愛の持つ聖さ、正当さ、約束にまさる。あなたがたの愛が結婚を支えるのではありません。そうではなくて、今よりのちは、結婚があなたがたの愛を支えるのです。」
- (2) 命題Ⅱ: マタイ 19・6 **「神は、あなたがたの結婚を分離不能のものとなさいます。結婚の奇跡が、今や、現在における神の行動として説明される。」**「神があなたがたを結婚によって結び合わせるのです。それをするのはあなたがたではないのです。これをなさるのは神なのです。」

¹² 命題Ⅰ，Ⅱは本文にあるもの。命題Ⅲ: 神は一つの秩序の基礎を置き、その中であなたがたが結婚生活をしながら共に生きることができるようにして下さいます。命題Ⅳ: 神は結婚に祝福を、そしてまた重荷を与えられました。命題Ⅴ: 神はあなたがたの結婚生活の基礎としてあなたがたにキリストをプレゼントされます。命題Ⅵは後述。

奇跡物語と結婚式説教のモンタージュ¹³をするとどうなるか？

このことの意味は、「奇跡物語と結婚式説教の過程の平行する点と、相違する点を強調し、現臨する方についての説教のための指示を得る」ため。

【共通点】

- ① 奇跡物語も結婚式説教も、目を奪う見事な光景。
- ② いずれも主イエスの御名のもとにある。
- ③ ひとつの過程に説明が加えられることで、その出来事が説教を規定する。一方では癒し、他方では結婚。

【相違する点】

- ① 見える姿からすれば、殆んど類似点はない。人の目の奪い方もそれぞれ異なる。
- ② しるしとしての性格も異なる。癒しは、「目覚ましい（否定できない）しるし」と呼ばれているが、結婚は「しるし」であることが見いだされることは、まずない。

この「ふたつの過程」を、説教の「テキスト」として取り上げる。

- (1) 奇跡物語は、癒しから始めて説教がなされるが、結婚は、結婚に向かって説教が語られる。
- (2) いずれの説教も、ひとつの神の、それぞれに相違する行為に関わりを持つ。主イエスを死人の中から甦らせ、主イエスによって信仰を起こされる方、神が、足萎えを健やかにし、人間の愛を聖なる婚姻となさる。
- (3) 結婚式説教が主張するこの過程は、我われの世界観からすれば、足萎えの癒しと殆ど変わりなく理解困難であり、驚くべきこと。
- (4) 奇跡物語はでは、使徒が語り、足萎えは逆らわなかったので、

¹³ モンタージュ (montage) は、映画用語で、視点の異なる複数のカットを組み合わせる技法のこと。元々はフランス語で「(機械の) 組み立て」という意味。映像編集の基礎であるため、編集と同義で使われることも多い。

足萎えは自分の足を使わざるを得なくなり、これによって、奇跡はひとつのしるしとなる。

(5) 同様に、ひと組の男女がその「務め」に召されることにふさわしくなるためには信仰を必要とする。新郎新婦がそれ自身で、救済史のしるしであるわけではない。自分に語りかけるみ言葉に従うことによって、その結婚がひとつのしるしとなる。

(6) 足萎えの癒しが説教を伴わなければ、古代の不思議な奇跡のまま。説教を伴わなければ、結婚式は、社会的ないしは生物学的過程でしかない。**み言葉が奇跡に先立つと同じように、み言葉は奇跡をしるしとする。**

求められねばならないのは、奇跡ではない。王座にまで挙げられた方の、今ここにおける現臨である。これこそ驚くべきことであることが証明される。

現臨される方についての説教に対する指示を得る。

この方を目に見える者から始めて、行動し、現実に関わる方として現臨する方を説くことはできないが、今は、隠れておられる方が見えるようになるためにも、この方が、行動し、現実に関わる方として宣べ伝えられなければならない。

【確定しうるもの】

- ① 結婚の成立を神の導きによるものと宣言することは、一種の預言者的発言であり、これこそ神の行為を語り告げ得るもの。

- ② 結婚を告げる厳かな言葉は、義認を説明し、それを適用してみせるだけのものでしかない。語りかけられた者たちがその勧告を受け入れるならば、それによってまた彼らも神を義とする。「自分達の行為は神にとって義なるものだ」と自分たちに言わせて下さる神を義とする。

ボンヘッファーは、「結婚式のための説教」の中の命題Ⅴで、罪の赦しについて次のように語る。

“神は、あなたがたの結婚生活の基礎としてあなたがたにキリストをプレゼントされます。「キリストも私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れて、神の栄光をあらわすべきである」(ローマ15・7)。一言でいえば、あなたがたの多くの罪が赦されている、その赦しの中でいっしょに生きなさい、ということです。それなしにはいかなる人間の交わりも、ましていかなる結婚も決して長続きするものではありません。互いに相手に対して権利を主張せず、互いに相手を批判したり裁いたりせず、互に相手を見くみせず、決して相手に責任を押し付けず、あるがままに相手を受け入れて、日々、そして心の底から赦し合いなさい。”